



Ella

魔法にかけられたエラ

Enchanted

Gail Carson Levine

ゲイル・カーソン・レヴィン

三辺律子 訳

Ella

魔法にかけられたエラ

Enchanted

Gail Carson Levine

ゲイル・カーソン・レヴィン

三辺律子 訳

Copyright © 1997 by Gail Carson Levin
Japanese translation rights arranged with Curtis Brown Ltd.
through Japan UNI Agency, Inc.

デイヴィットへ
すてきな歌に。

もくじ

第一章	「従順」の魔法	6
第二章	涙を流す木	15
第三章	准男爵夫人とふたりの娘	22
第四章	妖精の友人	31
第五章	父への抵抗	44
第六章	王立動物園で	52
第七章	危険、探究、三人の人物	60
第八章	ハテイのいやがらせ	69
第九章	アヨーサ国のアレイダ	76
第十章	マンデイからの手紙	83
第十一章	フィニシング・スクールの毎日	93
第十二章	旅立ち	101
第十三章	アーグレンの工芸品	110
第十四章	八匹のオグル	119
第十五章	思わぬ再会	129
第十六章	おしゃべりな騎士	141
第十七章	巨人たちの婚礼	149

第十八章	妖精ルシнда	159
第十九章	年上の婚約者	170
第二十章	父の再婚	180
第二十一章	荘厳なパヴァーヌ	186
第二十二章	せっかちな友人	199
第二十三章	欲ばりなオリーヴ	209
第二十四章	シャーからの手紙	219
第二十五章	悲しいうそ	233
第二十六章	王子の舞踏会	248
第二十七章	バストの町のレラ	262
第二十八章	仮面の下のエラ	272
第二十九章	ガラスの靴	282
エピソード		293

【改訳版】訳者あとがき 296

第一章

「従順」の魔法

あのとんな妖精のルシндаは、わたしに呪いをかけたなんて夢にも思っていないだろう。それどころか、贈り物をしたと思ってるんだから。そのとき、生まれたばかりだったわたしは、いくらあやしても泣きつづけていた。その涙を見て、妖精は突然閃いたってわけ。そして、わかっていますよ、とばかりに母さまに向かつてうなずくと、ほんとわたしの鼻をたたいた。「わたしの贈り物は『従順』です。これから、エラはどんな命令にも必ず従うでしょう。さあ、泣きやみなさい」わたしは泣きやんだ。

お父さまはいつものように、仕事で旅行にいらして留守だった。でも、料理人のマンデイはその場にはいた。マンデイとお母さまはぞつとして、それがどんなに恐ろしいことなのか、必死になって説明したけれど、妖精は聞く耳を持たなかった。そのときの言い争いのようすが目に浮かぶ。いつにもましてそばか

すが濃く浮きあがり、灰色の縮れ毛を振り乱して、二重あごを怒りで震わせているマンデイ。出産の疲れで茶色の巻き毛がしんなりし、目からいつもの笑いが消え、ひたすら辛抱よく説得をつづけるお母さま。でも、ルシンダがどうだったかは想像もつかない。わたしはルシンダの顔を知らないから。

結局、ルシンダは呪いを解かなかった。

わたしが初めて呪いの存在に気づいたのは、五歳の誕生日のときだった。その日のことは今でも、細かいつつどこまでもぜんぶ覚えている気がする。たぶん、マンデイがしょっちゅう話して聞かせるせいだろう。

「お誕生日にね」マンデイはいつもここから始める。「すてきなケーキを焼いたんですよ。六段重ねのをね」メイド頭のバーサは、わたしのためにとっておきのドレスを縫ってくれた。「真夜中のような深いブルーでね、白いサツシユがついてましたよ。そのころから、あなたは年のわりに小さくてねえ。真つ黒い髪に真つ白のリボンをつけて、興奮でほっぺたを真つ赤にしているところなんか、まるで中国人形みたいにかわいらしかったですから」

テーブルの真ん中には、使用人のネーサンが摘んできた花が花瓶からあふれんばかりに活けられていた。わたしたちはそろってテーブルを囲んだ（お父さまはこのときも留守だった）。わたしの胸は期待ではち切れそうだった。マンデイがケーキを焼いているのも、バーサがドレスを縫っているのも、ネーサンが花を摘んでいるのも、ぜんぶ見ていたから。

マンデイはケーキを切った。そしてわたしに渡しながら、何も考えずに言った。

「xあ、食べなxこ」

最初のひと口は至福だった。わたしは幸せいっぱい、ひと切れ食べ終えた。なくなると、マンデイは

もうひと切れ、切ってくれた。今度のは、さっきほど簡単には食べられなかった。それもなくなると、もうだれも勧めようとはしなかったけれど、食べつづけなければならぬことはわかっていて。わたしは、残っているケーキにぶすりとフォークを突き刺した。

「エラ、どういうつもり？」お母さまが言った。

「たしかにちょっとお行儀が悪いけど」マンディは笑った。「でも、奥方さま、今日はお誕生日ですから。好きなだけ食べさせてやりましょう」マンディはもうひと切れ切って、わたしのお皿にのせた。

胃がムカムカする。それに、怖かった。もう食べたくないのに、どうしてやめられないの？

もはや苦痛だった。ひと口ひと口が舌にのしかかる。ねばねばした糊のかたまりを無理やり飲みこんでいるみたい。わたしは食べながら、泣きはじめた。

最初に気づいたのは、お母さまだった。「食べるのをやめなさい、エラ」お母さまは命令した。

わたしはやめた。

だれでも命令ひとつで、わたしを思いどおりにできる。ただし、「シヨールをはおりなさい」とか「もう、寝なさい」というように、直接命令する場合に限る。ただ頼むとか、提案するだけなら、効力はない。「シヨールをはおってくれる？」とか「もう寝たら？」なら、いくらでも無視できるってわけ。でも、命令されたら最後、なすすべはなかった。

もし片足で跳ねている、と命令されれば、一日半でも跳ねていなければならぬ。でも片足で跳ねるなんて、まだまし。もっとひどい命令だつてありうる。自分の首をはねろつて言われたとしても、そのとおりにするしかないんだから。

常に危険と隣りあわせってこと。

大きくなるにつれ、命令に従うのを遅らせることはできるようになったけれど、そのたびにひどい目にあった。呼吸困難、吐き気、めまい、ほかにも数々の症状に襲われる。とてもじゃないけど、長いあいだはがまんできない。二、三分もたせるだけでも、死にものぐるいだった。

わたしには、妖精の名づけ親がいる。お母さまはその人に呪いを解いてくれるよう頼んだけれど、それができるのはルシンダだけだと言われてしまった。けれど、いつかルシンダの手を借りずに呪いは破られるだろう、とも言ったらしい。

でも、その方法はわからなかった。そもそも、わたしは名づけ親の妖精がだれなのかも知らなかったのだ。

ルシンダの呪いのおかげで、わたしはおとなしくなるどころか、むしろ反抗的になった。まあ、もともとそういう性格だっただけかもしれないけど。

お母さまがわたしに何かしなさいと言うことは、めったになかった。お父さまは呪いのことはまったく知らなかったし、そもそもほとんど会わないから、命令されることもなかった。でもマンデイときたらとんだいばり屋で、それこそ息をするように命令をした。親切心からの命令もあれば、いわゆる「あなたのためなんですよ」っていう命令もある。「厚着しなさい、エラ」とか、「卵をかきませてるあいだ、ポウルを押さえてちょうだい」とか。

いくら実害がなかったとしても、わたしはこういう命令が大嫌いだった。しょうがないからポウルは持ったけれど、その代わり足を動かして、マンデイを台所中引きずりまわしてやった。マンデイは、このおて

んば娘！ と叫んで、今度こそ逃げ道をふさごうと命令をより具体的にするのだけれど、わたしはまた新しい抜け穴を見つけた。そんなだから、何をするにもいちいち時間がかかる。お母さまは笑いながら、マンデイとわたしと、かわりばんこにけしかけた。

でも、終わりはいつもめでたしめでたしだった。わたしがマンデイの言うとおりにするか、マンデイが命令をお願いに変えたから。

マンデイが、そのつもりがないのにうっかり命令してしまったときは、「それって命令？」とききかえすことにしていた。そうすれば、マンデイは言い直してくれた。

八歳のとき、わたしにはパメラという友だちがいた。パメラは召使いの子どもだった。ある日、わたしはふたりにマンデイがマジパンを作っているのを見ていた。マンデイが「食料室からもうちよつとアーモンドを取ってきて」と言ったので、わたしは二粒だけ取ってきた。次はマンデイも、うんと細かく指示を出したので、わたしはまだなんとかマンデイの裏をかく方法はないものかと考えながらも、マンデイの言った通りにした。

そのあと、パメラとわたしは庭へいって、アメをほおばった。パメラが、どうしてすぐにマンデイの言うとおりにしなかったの、ときいた。

「マンデイっていばるんだもん」わたしは答えた。

パメラは自慢げに言った。「あたしは、いつも大人の言うことをきくわ」

「それは、きかなくなつていいからよ」

「そんなことないよ、父さんにたたかされるもの」

「わたしとはちがうわ。だって、わたしは魔法をかけられてるんだもん」

わたしは、この言葉のもつ重みを楽しんでいた。魔法なんて、めったにお目にかかれるものじゃない。軽々しく人間に魔法をかけてまわる妖精なんて、ルシンダくらいだったのだ。

「眠れる森の美女みたいに？」

「わたしは、百年も眠らないけどね」

「どんな魔法なの？」

わたしは話した。

「それって、だれかに命令されたら、ぜったい逆らえないってこと？ 相手があたしでも？」

わたしはうなずいた。

「やってみてもいい？」

「いやよ」そんなことを言われるとは思っていなかったもので、わたしは話題を変えた。「門まで競走しない？」

「いいよ。でも、あんたが負けて。命令よ」

「じゃあ、やらない」

「競走しなさい、それで負けて」

わたしたちは競走した。わたしは負けた。

わたしたちはベリーを摘んだ。わたしはパメラにいちばん甘くて、熟したのをあげなくてはならなかった。それから、「王女とオグルごっこ」をやった。わたしがオグル役だった。

魔法の話打ち明けてから一時間後、わたしはパメラにパンチを食らわした。パメラは悲鳴をあげて、

鼻から血がふきだした。

わたしたちの友情は、その日で終わった。お母さまは、わたしたちのフレルの町から遠く離れたところに、パメラのお母さんの新しい勤め口を見つけてきた。

暴力を使ったことを叱ってから、お母さまはわたしに、めったにしない命令をひとつした——呪いのことは決してだれにも言わないこと。でも、どっちにしろ、二度と言うつもりはなかった。わたしは、用心することを学んでいた。

十五歳になるちよつと前だった。お母さまとわたしは風邪をひいた。マンデイは、ニンジンとニラネギとセロリとユニコーンのしっぽの毛で作った特製スープをわたしたちに飲ませた。味はおいしかったけど、野菜にまじって長い黄ばんだ毛がゆらりと浮かんでいるのは、かなりぞつとする光景だった。

お父さまはフレルを留守にしていたので、わたしたちは、お母さまのベッドにすわっていつしよにスープを飲んだ。お父さまがいるときは、両親の部屋には寄りつかなかった。お父さまは足手まといだと言って、わたしがそばにくるのをいやがった。

マンデイに言われたので、わたしはしぶしぶ毛といっしょにスープを飲んだ。それでも思わず顔をしかめた。ついでに、マンデイの出ていく後ろ姿にもイーツとしかめっ面をしてやった。

「わたしは冷めてから飲むわ」お母さまは言った。そして、マンデイが出ていくと、毛を取りだしてスープを飲み、飲み終わってから空のお皿にもどした。

次の日、わたしはよくなり、お母さまはますます悪くなっていた。お母さまは、もう何も飲んだり食べ

たりできなかった。のどにナイフが刺さって、頭を槌でたたかれているようなので、と言う。気分がよくならないように、わたしはお母さまの額に冷たい布をあてて、お話をしてあげた。ありふれたおとぎ話をちよつとずつ変えて話したただけだったけれど、それでもときどきお母さまは声をあげて笑った。ただ、それもすぐ咳になってしまった。

夜になってマンデイに部屋から追いだされたとき、お母さまはわたしにキスをしてくれた。「おやすみ、わたしの宝物」

それが、わたしへの最後の言葉になった。部屋を出るとき、マンデイへの最後となった言葉が聞こえた。「そんなにひどくないのよ。だから、ピーター卿にはお知らせしないで」

ピーター卿というのは、お父さまのことだ。

次の朝、お母さまは起きてはいたけれど、夢うつつだった。目を大きく見ひらいて、見えない廷臣たちとおしゃべりをし、しきりに銀の首飾りをかきむしった。なのに同じ部屋にいるマンデイとわたしには、何も言わないのだ。

使用人のネーサンが医者を呼んできた。医者はわたしをお母さまの枕もとから追いはらった。

廊下はがらんとしていた。突きあたりのらせん階段までいって、おりていくと、お母さまと手すりをすべりおりたときのことか思い出された。

もちろん、まわりに人がいるときはやらなかった。「わたしたちは、しとやかにしてなくちゃいけないのよ」そういうとき、お母さまはささやいて、わざとうんと優美な身ごなしで階段をおりていく。わたしも、生まれつきの不器用さと闘いながらお母さまのまねをしてついでいった。お母さまのおふざけの仲間にな

れるのが、うれしくてたまらなかった。

でも、わたしはちしかいないときは、上から下までキャーッと歓声をあげて手すりをすべりおりた。下までいくと、また駆けあがって、二回、三回とすべりおりたっけ。

階段をおりると、玄関の重い扉をギイーと引っぱって、明るい日の光のなかへそつとすべりだた。古いお城まではかなりあったけれど、わたしは願いごとをしたかった。そして願いごとをするなら、いちばんかなえられそうな場所でしたかった。

このお城は、ジェロルド王が子どもころから、ずっと使われていない。今でも、内輪の舞踏会とか結婚式などの特別なときには開かれたけれど、バーサは幽霊が出ると信じていたし、ネーサンはネズミがうようよしていると言っていた。お城の庭は草が伸びほうだいだった。でも、バーサは、あそこのロウソクの木にはまぢがいなく魔力がありますよ、と言っていた。

わたしはまっすぐロウソクの木立ちまでいった。小さな木々は、枝つき燭台の形に育つように刈りこまれ、針金に結わえてあった。

願いをかけるなら、何かひきかえにするものがある。わたしは目を閉じて祈った。

「お母さまがすぐよくなりますように。そうしたら、わたしは従順なだけじゃなくて、いい子になります。おしとやかにするよう努力もします。マンデイをあまりからかわないようにします」

わたしは、お母さまの命を願いはしなかった。お母さまが死ぬかもしれないなんて、思ってもいなかったから。